中学生との動物愛護ワークショップ　～処分頭数「0」を目指して～

○小野 祥平　傳田 修一　有賀 良次　小山 淳一

1 はじめに

現在、動物愛護センターで実施する中学生を対象とした普及啓発活動は、職業体験を行うことがそのほとんどであり、それ以外の方法での活動を行う機会が得にくい状況にある。職業体験ではセンターの活動内容を理解してもらい、体験を通じて仕事や勉学への意欲を深める、ということが目的であるために、動物愛護に関する普及啓発活動に重点がおかれなくなってしまいかねない。

ところで、何らかの問題解決を図る際の手法として、近年ではワークショップが注目されている。ワークショップには、問題意識を喚起し、また共有することによって、自発的に問題解決のための行動をとるよう促す、もしくはそのトレーニングの効果があると考えられている。このことから、ワークショップは動物愛護の普及啓発に関しても適用できるものと考え、また県内の中学校でその機会を得られたので、その概要を報告し、課題などについて考察を加えたい。

2 背 景

(1)　学校側の趣旨

「生徒、先生、保護者、そして地域の方々、みんなで学ぶキャリア教育！」をテーマに、PTA役員が選出した地域で働く人たちを講師として招き、生徒、保護者、先生が共に学ぶ体験学習的キャリア教育を「家族参観日」として実施することを目的としていた。生徒は職業体験学習として、学校が指定した10種の職業から興味ある職種一つを選択・参加することとした。また、この家族参観日は同時に、教育委員会等の主催する「学社融合」をテーマにした生涯学習フォーラムの一部を兼ねていた。

(2)　ワークショップ形式を採用した理由

第一に「何かを教える」といった一方通行的な講義をするのではなく、ともに考えることで問題意識を喚起させ、また共有するためである。第二には、ワークショップを体験することで、その存在の紹介と面白さ・有用性を伝えるためであり、第三としては、「学社融合」や「みんなで学ぶ」というテーマとワークショップ形式の理念が合致すると考えたためである。

3 対象、期間および方法

(1)　対象

K中学校の1～3学年、28名

(2)　期間

2007年6月21日に事前打ち合わせ会議を行い、7月7日にワークショップを実　　施した。

(3)　方法

1) 事前打ち合わせ

6月21日に、担当教諭・生徒代表・保護者代表との事前打ち合わせ会議を実施し、「犬猫の処分頭数ゼロを目指すために何をすべきか」をテーマに、ワークショップを行うことについて合意した。また、ワークショップを行うために、生徒を5グループ程度にグループ分けするよう依頼した。さらに、参加する生徒全員には課題として、当日までに処分頭数を減らすためのアイディアを、可能な限り考えておくよう依頼した。

2) 当日

始めに導入として、犬猫の処分の現状とそこからの問題提起を、スライドを用いて行った。続いてグループに分かれ、約30分間のワークショップに入った。30分間の構成は、各個人の意見表出、それらの意見を基にしたグループ内での議論と展開、そしてグループごとに意見・提言を集約、という過程で構成した。最終的に、集約された意見・提言をグループごとに発表し、ワークショップを終了した。

3) 事後アンケート

学校側が、生徒及び保護者に対してアンケート調査を実施した。

4 結 果

⑴ 集約された意見･提言

自分たちができることとして、責任を持つこと、避妊･去勢手術を行うことなどが挙げられた。社会のシステムに対しては、動物を飼養する人同士が交流したり勉強しあえたりする場を設ける、動物に住民票を与える、罰則を強化する、避妊･去勢手術に助成金を出す、といった意見が出された。

⑵ 感想など（学校から送付された報告書から転記）

1) 生徒からの感想

「みんなで考え合ってすごい興味がわいてきたから、もっと深く考えていきたい。「命」と言うことをすごく考えさせられました。」（2年女子）

2) 生徒用アンケートの結果（「はい」と答えたパーセント）

①この学習は楽しかった。　100
②この学習はためになった。　96
③話の内容は興味深かった。　100
④体験学習は楽しかった。　100

3) 保護者から

「獣医師の学習と言うことで、犬の苦手な息子が選んだことにまず驚き、中学生になったらこのような学習フォーラムの仕方に驚き（内容が濃い）。グループの2～3年生の子の責任性、リーダーシップに驚き、とても楽しく学習ができました。処分される犬猫の頭数を減らすためには、どうしたらよいか。子どもと一緒に考えることができ、とても充実した時間がすごせました。」

5 考 察

ワークショップの進行中、生徒たちの注意がそれることなく、スムーズに実施することができた。また、意見集約の終盤では、グループ内の意見がまとまったことで自然に拍手が沸き起こる場面もあり、協調性や自主性、加えて特にグループ代表者のリーダーシップを感じさせるものであった。これは、ワークショップの形態、すなわち少人数グループにすることで参加者全員の能動的な参加を可能にすること、短時間で区切って次のステップへ移行すること、が機能したことによるものと思われる。また一例ではあるが、生徒からのアンケートでは、興味や問題意識を喚起することに成功したことが伺える。よって、少なくともワークショップで扱うテーマに興味･関心があるならば、中学生はこうした形式での活動が十分可能な年齢層であると言える。逆に、保護者からのアンケートでは、ワークショップ自体は盛り上がったが、ワークショップ終了と同時に問題意識がなくなり、以降の普段の生活に生かされず、単なるイベントに終わってしまった可能性が示唆される。このことは、ワークショップ形式にありがちな課題であるので、そうならないための準備･進行の方法を模索しなければならないだろう。

ところで今回のワークショップでは、本来なら各グループに1～2人必要となるファシリテーターを配置することができず、全てのグループのファシリテーションを一人で行ったため、ファシリテーターとしての機能･役割が不十分な状況であった。ファシリテーターの機能には、単に司会進行や議論を促進させる役割だけでなく、参加者の提示した意見に対して、その根拠･背景となる考えを確認し、提示された意見に潜む問題点や逆に意外な可能性を提示することで、テーマに関する興味をより引き立て、さらなる問題意識を喚起したり、より質の高い議論へ発展させたりする働きがある。例えば、飼い主が責任を持って飼う、という意見が出された場合、ファシリテーターがいれば、責任を持って飼うためにはどうするか、なぜ責任を持つことができないのか、等と言った次の問題提起をすることができたはずで、そのことによって、新たに自ら深く考え議論するきっかけを提供し、処分頭数を減らすための新たな展開が生まれた可能性がある。

児童や生徒とワークショップを行うには、学校側の理解や協力が必要不可欠であり、また、質の高いワークショップの実施には、質の高いファシリテーションをしなければならず、ファシリテーター育成のための研修がなくてはならない。よって今後、このような機会を得られるかは未知数であるが、もし実施することが可能になれば、動物愛護の普及啓発活動の一形態として、独自にアンケートや追跡調査をすることで、さらに有用性について検証を加えて行きたい。